

# うきたむ

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館報

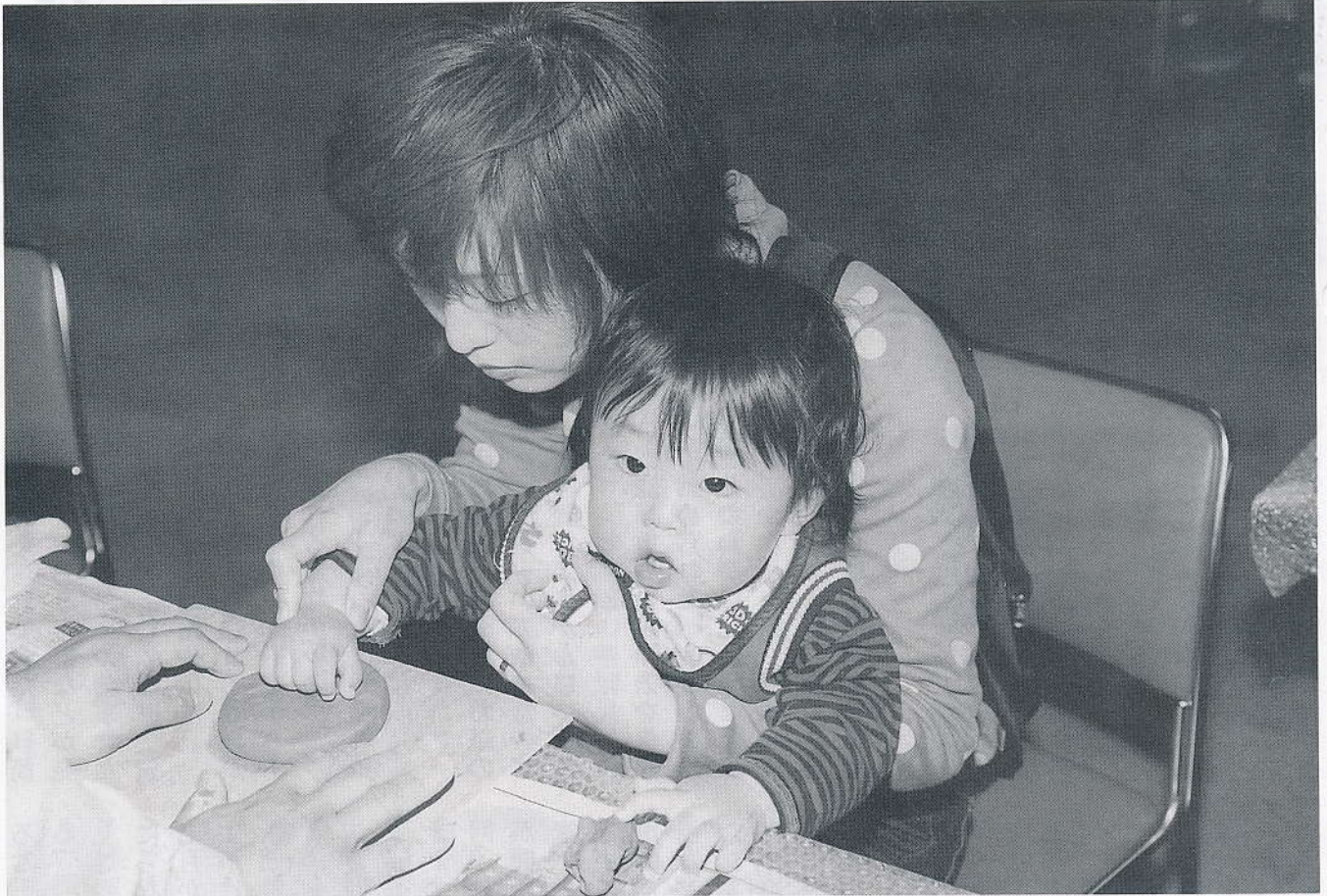
山形県東置賜郡高島町大字安久津2117 TEL0238-52-2585

FAX0238-52-4665

<http://www.pref.yamagata.jp/ky/shakai/222600/top.htm>

## 第23号

### 2004.5.1



▲赤ちゃんの手形づくり(2003年5月)

## 地域の祭りから学ぶこと

山形県教育庁社会教育課文化財保護室

室長補佐 佐藤 庄一

桜花爛漫の四月、私の住む清水町地区では深山神社の春祭りが行われる。四月二十三日は神社の旗立て、二十四日は本祭り・直会と地区全戸参加の行事が続く。祭りの昇り旗は神様が天から神社に降りてくるための目印で、直会では人々が酒を媒介に神様と一体になるために催すのだという。

五〇戸程度の小さな地区だが、地区内に東正寺・烏帽子山八幡神社・浪重稲荷神社と赤湯を代表する寺社が三つもあるのが自慢である。地区民は檀家や氏子として行事に協力し、寺社では稲の収穫後に酒や飯を地区民に振舞う。地域の文化を大切に、文化財を核にした地域づくりをというが、文化(財)を守り伝えてきた人々の伝統を忘れてはならない。

大自然そのものを神として畏敬し、尊敬してきた古代の人々は、やがて神が降臨すると考えられる場所に神がいるときの祠を建てるようになり、それが神社建築の始まりと考えられている。うきたむ風土記の丘考古資料館の近くには伊達氏以来の崇拜の集めた霊地安久津八幡神社があり、秋の例祭には舞楽殿での「延年の舞」や流鏑馬等が奉納される。

考古資料館では、毎年九月に「うきたむ縄文まつり」を開催し、昼は縄文体験教室、夕刻からは縄文太鼓の演奏を楽しみながら縄文料理とお酒を味わっている。祭りはそれを真剣に行う人々によって創られるという面もある。「縄文まつり」が館員や地域の人々によってまつりとしての意義付けがなされ、地域の新しい祭りとして益々発展することを期待したい。

# 埋められた経

## こめられた願い

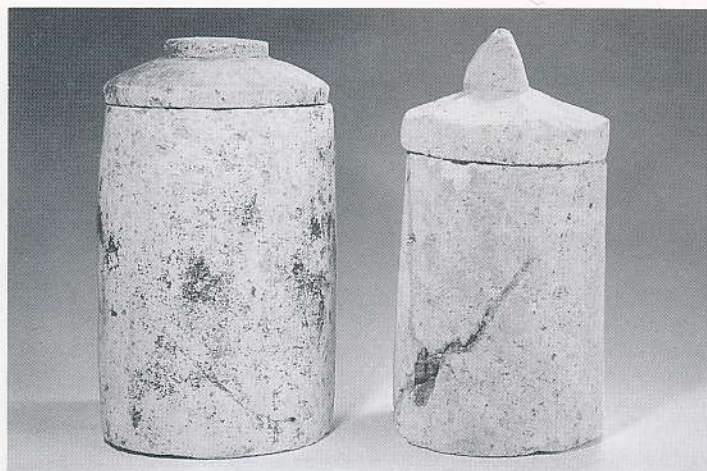
### 第12回企画展やまがたの経塚

#### ●経塚とは

今年度一〇・一一月に開催される第一二回企画展は「埋められた経 こめられた願い」と題して開催されることとなった。

「いーやまがたの経塚」のテーマで開催されることとなった。経塚とは、お経を書写し、これを経筒に入れ、厳重に密封して地下に埋められたものである。いわばタイムカプセルで、後の世に釈迦の教えである経典を伝えようとしたものである。その始まりは、平安時代後期の一〇世紀頃で、経を埋めたり、納めたりする行為は今も行われている。そうすることが平和や安全につながり、人びとに利益をもたらす行いである。

▲白鷹町笠松山経塚出土の石製外容器  
(白鷹町教育委員会蔵)



あると考えられてきた。経筒やそれをおおう容器などが発見されるが、銘文の刻まれたものもあり、だいたいの歴史資料である。また鐘や仏法具・仏像なども発見されることがあり、金工史や陶磁史からも重視される遺物が多い。

#### ●小石に托すねがい

江戸時代には礫石にお経の一字ずつを書いて納めた一字一石の経塚がさかんにつくられた。病魔退散や災害除去をねがって納められた。人びとの現世利益のねがいを反映したものであった。

県内にはおそらく数百か所の一字一石経塚があると思われる。

#### ●人びとの願いと信仰の歴史を 考えるために

この度は県内はじめてのころみとして、県内の主な経塚の出土遺物が展示される。そこに日本人の熱烈な浄土を求め、心の一端をかいまみ

ることができ

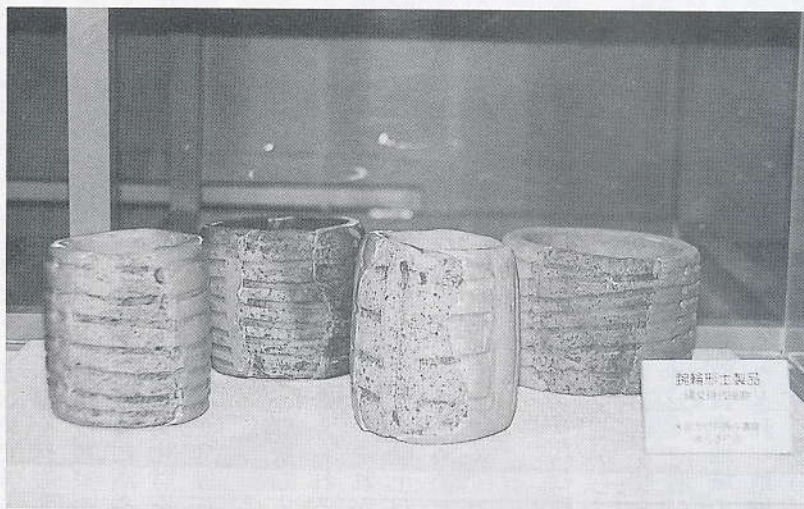
この企画展にちなんで、七月から八月にかけての第六期考古学セミナーは、「信仰の歴史と考古」のテーマで、五回連続の講座が開かれる。また企画展開期中に講演会が開催される予定である。



#### ●縄文・弥生 コーナーを充実

##### コーナーを充実

これまでの米沢市台ノ上遺跡に加えて、下野遺跡や郡の神遺跡など西置賜地域から出土した中期末・後期初めの土器、珍しい米沢市竹井境遺跡の腕輪形土製品などが展示されている。



▲よそおい新たな縄文コーナー、腕輪形土製品  
(米沢市竹井境遺跡出土)

よそおいも新たに展示コーナーもスペースをひろげ、より充実をはかった。また弥生時代の展示では、新たにまんぎり会から借用した米沢市清水北C遺跡の土器と高島町観音岩陰群出土の貝輪や骨針などが展示されている。これらの展示資料のなかには、県内ではきわめて稀な貝の鏝などもあり注目に値するものが多い。

# 遺跡めぐりの楽しみ

「遺跡めぐり」は、とても楽しく、自然や景観に親しみながらロマンをかきたてるすばらしい学習の場である。これまでの本館の行事をたどりながら、その学び方楽しみ方を考えてみよう。

今年もこれから多くの遺跡めぐりが企画されている。多くの方々の参加を期待している。



▲明日香・橘寺にて

## ●三内丸山から始まった 遺跡めぐりの旅

わが考古資料館の遺跡めぐりは一九九六年から始まり、今年で一〇年目になる。春と秋に県内の遺跡や史跡、古社寺をめぐり、初夏には一泊のみる・きく・ふれる遺跡の旅があり、初回は青森市三内丸山遺跡や秋田県大湯環状列石をめぐった。

その折は四五名の参加であった。旅に一つのテーマをもたせるスタデーツアーがかえりみられたせいか、定員をはるかにこえる参加であった。思い思いに遺跡や考古を語り、懇親の場としても盛りあがりをもせた。

この一泊の旅は、その年発足した「うきたむ考古の会」の事業として二回目藤原の郷（岩手）、三回目会津の古代を訪れる（福島）、四回目下野や那須の風土記の丘とその周辺、五回目古代の北方世界のテーマで北上・秋田、六回目は福島南部の原町やいわき周辺、七回目は同じく白河と須

賀川、そして八回目の昨年は新潟の長岡や柏崎をまわり、鯨波温泉に泊まった。

春と夏の一日の遺跡めぐりは、まず近くの置賜から始まって、ほぼ全域をまわって、よその地域にも足をのぼすようになった。昨年の春は天童、秋は大江・朝日方面へとめぐってきた。

## ●遺跡めぐりあれこれ

遺跡めぐりには、今紹介したように大勢で、小グループでと様々な規模がある。また、その目的も特定のテーマを絞ったり、博物館の特別見学を主な目的にしたりと様々だ。

当館に集う「うきたむ考古の会」では、出羽越後国境の遺跡に注目して探訪したり、奈良県飛鳥へと足を伸ばしたり、また「発掘された日本列島展」（2003年福島県博）や「東北発掘ものがたり」（東北歴史博物館）等の見学会を企画した。

## ●遺跡めぐりの魅力

遺跡を歩き、じかに目にす

ることは、この上なく歴史や考古についての認識を深め拡げる学習の場である。その景観や自然にふれることは、歴史の舞台を知る上で、迫力と臨場感はすぐくわれわれの心をゆさぶるものがある。

それだけではない。野の草花に接し、自然の風景を観ることは心を豊かになごませてくれる。そして健康にもとてもよい。

今年度も、わたしたちの館では、五月三〇日春の遺跡めぐり（山形東部の古社寺・遺跡）、六月二七・二八日みる・きく・ふれる遺跡の旅は、岩手天台寺、御所野遺跡、八戸根城、是川などをめぐり、一〇月二四日は秋の遺跡めぐりで、天童・東根をまわる予定。多くの方々の参加を期待している。

## ●フィールドワークの チェックリスト

できたら地図などひろげて、予備知識のあった方が、楽しみが深さがちがう。

長ズボンで、シャツも防虫



▲ありし日の遺跡めぐり（大隅遺跡）

や日焼け対策に長袖がよい。帽子も必要、衣服は派手な色の方が目立ってよい。靴ははき慣れたスリッパ防止底。時計・磁石・手帳・筆記用具・カメラ・手袋・必要な薬・保険証・地図・簡単な雨具など必要に応じて。両手はできるだけあけておくようにした方がよい。

一般的な説明は通説にしたがって行うことが多いが、異見や疑問点は率直に出していただいた方が皆のためになる。



平安のなごりをとどめる

## 深山観音堂

西置賜郡の白鷹町大字深山に、国指定の重要文化財となっている観音寺観音堂がある。俗に深山観音という。

深山の集落の奥まったところ



▲国指定重要文化財「深山観音堂」

ろ、石の階段を二〇段余り上ると屋根がみえてくる。両側には杉の巨木があり、上りつめたところに杉林の山を背後に、屋根の勾配がゆるやかに曲線をえがく優美なお堂が立っている。

一見して平安後期の阿弥陀建築が思い起こされる。そして宮城県高蔵寺阿弥陀堂やいわき市の白水阿弥陀堂が頭をよぎる。こんなに古い建物がかつとにあって、かとしばらく眺めてみる。太平洋戦争が終るまで、古い優美なお堂があったとは知られていなかった。この堂が新たに見直され脚光を浴びたの

は一九四六年頃であった。

三間四方の宝形造。柿葺(こけらぶき)が最近茅葺に変えられ、屋上の宝珠も近世に造られたものである。小さな堂にもかかわらず柱は一尺三寸(約四〇センチ)という杉の円柱で、わりと薄い舟肘木を用い桁を支えている。

垂木は二重疎垂という簡素なもので、内部総板敷、方一間を仏間とし、ここは天井を張っているが、他は化粧屋根裏である。正面の棧唐戸や横板壁は近世のもの、内部の大虹梁は室町期の唐様。形式的には平安様式であるが、大方は室町期の大修理によるもので、江戸期にも補修が行われている。

内陣にあった菰(こも)に包まれた焼けて木杭のようになった千手観音は平安期の丈六の像で、別の堂にあったのであろう。もともとこの地の豪族であった鮎貝氏の庇護を受けてきたといわれる。

飯豊の中村観音堂や菽生恩徳寺などとともに、古代から花開いた仏教文化の遺跡として注目される。

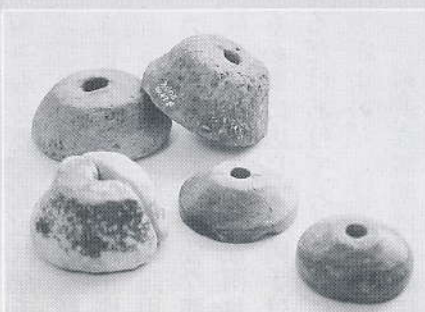
## 我が館の展示品⑬

## 寝鹿遺跡の紡錘車

寝鹿遺跡は、主要地方道高畠川西線の改良工事に伴い調査された古墳時代終わり頃(6世紀後半)の遺跡である。土坑などから土師器や土製品・石製品が出土している。今回はその中から、紡錘車(ぼうすいしゃ)を紹介する。

紡錘車は、糸を紡ぐ際に用いる道具であり、大陸から機械の技術が伝わった弥生時代から普及したと考えられている。中央にあけられた孔に、糸にする繊維を付けた棒を通し、紡錘車を回転させることで、繊維に撚りがかけられるのである。

寝鹿遺跡からは土製と石製の紡錘車が見つかっている。土製のものは直径5.3cm重さ52〜57g、石製のものは直径3.7〜4.8cm重さ30〜35gである。紡錘車の形や重さは、撚りをかける繊維の種類や紡錘車の回



▲寝鹿遺跡の紡錘車

し方に関連していると考えられるが、詳しい事は分かっていない。これらの紡錘車で撚りをかけた繊維は一体何であったのだろうか。アオソかアカソか……。当館では、同じく古墳時代の遺跡である高畠町森前遺跡・南原遺跡、山形市宮町遺跡・鷲の森遺跡・七浦遺跡から出土した紡錘車も展示している。これらを見つめると、まるで当時の糸づくりの情景が浮かんでくるようである。